

「E K I e n t e r」

揖斐千里作

K かよ 女子高生

E 駅員

M みほ 女子高生

その他 列車の乗客たち

素舞台。Kがきよろきよろしながら、上手から入ってくる。
下手から、E登場。

K あ、あの、すみません。

E、Kの前を素通り。

K え、無視？ あのすみません。（怒鳴り気味で）

E は、はい。

K こんにちは。

E こんにちは。

K あの、ここは？

E ここ？ あ、えーと、駅です。

K 駅？ あなたは？

E はい、駅員です。

K、Eを上から下まで眺めて。

K 素敵な男性との出会って、書いてあったはずなんだけど。

E え？ ああ、はいはい。

K はいはいじゃなくて。

E ここですここです。大正解。

K え？ もしかして、あんた？

E いやいや、私なんか、その、根本的にそついうのじゃなくて。

K 男じゃないの？

E いやー、男って言えば男、そつじゃないって言えば…。

K なんか変な人。まあ、いいや。あの、出口教えてくれませんか。

E 今さつき来たばつかじゃないですか？

K なんでそんなこと知ってるんですか？

E え、いや、出口なら…、あ、来た来た。

E、懐中時計で時間を確かめる。電車の近づくSE。

K あ、ほんとに電車来た…。意外に凝ってる。

電車の止まるSE。E、電車を誘導し、笛を吹く。すると、客が降りてくる。

K え、今ごろ客来るの。ふーん。でも、けっこう人気あるんじゃない。これに乗って帰るんだ。じゃ、駅員さん。

E あ、ちょっと、ちょっと待ってください。

K なんですか。

E ここを見つけたのも何かの縁です。もう少しいたらどうですか？

K えー、つまんないし。

E 見た感じでは、分からないかもしれませんが、まあ、ここはなんというか、本当に話さなければならぬ人と話す場所、なんですよ。

K 本当に話さなければならぬ人…。

E 興味湧きませんか？

K いまいち意味分かんない。

E とにかく、あとちょっと、いてもらっていいですか？

K まあ、どうせ暇だし。

間。二人互いに気にしているが、無言のまま。

K ちょっと、引き留めといて無言でどういことっ。

E いえ、あ、あの…。だめなんですよ、こっぴつての苦手で。

K はあ？

E まあ、しょうがありません。帰るんだったら、電車に乗ってください。それでは。

E、去る。

K ちょっとー！ 何、無責任な。駅員が駅ほったらかしてどうすんのよー。…はあ。はずれか。

K、去る。電車の出発音。Kが走って戻ってくる。

K やっぱ、本当に話さなければならぬ人なら、話してみたいじゃん。でも、誰なんだろう。

電車の到着するSE。客が左右に行き交う。

K もしかして。

K、あちこちに走り回って、客の顔をのぞきこむ。戻る。

K なんだよ、誰も彼もみんないまいち。はー。本当に来るのかな。来るんだったら誰だろう。んー、あつこ、ともみ、ゆきの、なつみ、はつえい、だよ、そんなで話さなければならぬ人っていうと、特にいないよね。はー。

電車、出発。

K 一体誰だよ。(椅子に座り込む)ちょっと待って。素敵な男性との出会いってあって、ここに来たんだから、話さなければならぬ人って…、きつとそうだよ。手越先輩！きゃーどうしよ。先輩？ マジ？ 絶対そうだよ。私が今話したい人だよ。うん、絶対そうだよ。ここにきてること、待ってよー。

一分も経たないうちに。

K 先輩まだかな。遅いなあ、はー。お風呂入ってた。ならしょうがないな。もうそろそろ出てきたかな。あー、何してんだろ。

M、下手から登場。

M こんにちは。

K こんにちは。

M みほです。お話していいですか。

K かよです。いいですよ。

M ずいぶん遅い時間まで出かけてるんですね。

K まあ、だいたい毎日こんな感じ。

M 学校は大丈夫？

K え？ なんていきなりそんなこと分かるの？

M あ、いやー、なんとなく。友達感覚になっちゃって。

K っことは。

M うん。私も。

K あ、ねえねえ、ここって駅なんですよ。

M そうらしいねー。

K 駅員って会った？

M 駅員？ あーあー、あのちょっとキョドってる。

K そうそう。何か言われた？

M 何か？

K ここは、話さなければならぬ人と話す場所だとか、なんとか。

M あー、そういえば言ってみたいな。

K もしかして、その人って…。

M あ、そう、かな？ いや、よくわかんないけど。

K そうだよね。私は、憧れの先輩と話せるんじゃないかって、勝手に思ってたんだけど。
M 憧れの先輩！？ 誰なんだ。

K えっ？

M あ、いや、えっと、どんな人。

K サッカー部のキャプテンだね。とにかくカッコいいの。

M ふーん。

K ふーんって、それだけ？

M え？

K ちゃんと会話盛り上げなきゃ。

M ああ、そうなの。えーと、あ、そうだ。こんな時間まで、親さんが心配しない？

K は？ 何言ってるの？

M 夜も遅いから。

K 心配なんて、絶対しない。あのクソは自分のことしか考えてないから。

M クソ？

K クソ親父だよ。仕事仕事ってろくに帰っても来ないで、挙げ句、お母さん愛想尽かして出て行っちゃって。

M 大変だったね。

K それから、いちいち干渉してくるようにはなったけど、要するに、私が勉強しないで夜中までこんなことしてるってやっと分かったから、気になってしょうがないだけだよ。心配なんかじゃない、気分だよ、気分。

M そうかなあ。

K そうだって。お母さんが出て行くなってなった時も、あのクソはろくに止めもしない。このままでいいのかって言ったら、クソがなんて言ったと思う？ 『子供は親のことに口出さんでいい』って。ほったらかしにしたからこうなったのに、まだあんなこと！

M、不意に立ち上がる。

K どうした？

M ちよっと、ごめん。

M、下手に引込む。入れ替わりに、E、出てくる。

K あ、あんた。

E まだいたんですね。ちゃんと待っていてくれたんですね。

K お前のせいだ。お前のせいだ。

K、E につかみかかる。

E え、私、何かしましたか？

K とぼけてんじゃねえよ、この詐欺師が。

E 詐欺師？

K 話さなければならぬ人って言うから、てっきり憧れの先輩かと思って待ってりゃ、誰も来やしない。なにが素敵な男性との出会いだよ！

E それは、あなたが勝手に決めつけていたことで、ちゃんといえますよ、話さなければならぬ人。

K とかなんとか言っつて、騙すつもりだろう。駆つてというのが、怪しいよ。電車に乗っけて、どこかやばいところよ。

E そんなことするわけないじゃないですか。

M、下手から戻ってくる。

M 何やってるんですか。

E あ！

K あんたはさっきの。

M 何かあったんですか？

K こいつ、嘘つきなんだよ、詐欺師なんだよ。

M 違う。この人は嘘なんかついてない。(Eに)すまないな。

E いえ、私は。

K 何？ あんたらグル？ 何よ、何が目的なの、ここ？

M 聞いて。実を言うと…。

突然、大音響がして、三人がふらつく。照明極度に暗くなる。大勢の人間が、以下のような脈絡のないことを口々に言いながらやってきて、至近距離でKを取り囲む。

「もつ、うざいうざいうざい。学校も家も何もかもなくなっちゃえばいいんだ。」

「さどしたら、ほんとにむかつく。何よ、あんな女に目移りしちゃって。」

「7日までにお申し込みになりますと、素敵な特典をプレゼント。なんと、イギリス、ロッテルダム社の…」

「飛行機の好きな人、お話ししましょう。こちらは、主に1940年代の複葉機が好きで、」

「この商品を購入された方は、以下のようなものにも興味を示しておられます。」

ひとしきり混乱が終わると、Kを残して誰もいなくなる。Kにスポット。

K え、どうしたの、これ？ え？ え？ 誰かいらないの。ねえ！ 誰か！

K、スポットの範囲で壁に取り囲まれていて、外へ出られない。

K 苦しい。こわい。いやだ、消えたくない。助けて。助けて助けて助けて。おとっさーん！

M かよーっ！

Mの声が出て、MがKのスポットに飛び込んでくる。K、必死にMにしがみつく。

M 大丈夫！ 大丈夫だから、な。俺がついてるから。混線して、データが乱れただけだ。ハングアップは藤崎がなんとかしてくれる。大丈夫。

ゆっくりと照明が戻る。下手から、Eが出てくる。

E なんとか復旧できました。

M ご苦労さん。ありがとう。

K ……どうしたの？

M もう大丈夫だから。怖い思いをさせたね。

K さつき、『かよーっ』って飛び込んだの…。

M ああ、えーっと、私。

K お父さんかと思った。

M え？

K 小さい頃、家族で海水浴に行ったんだ。遠くへ行っちゃだめだよって言われてたのに、いつの間にか沖に流されちゃって、気がついたら、周りにいっぱい波が立ってるだけで、何も見えないんだ。閉じこめられたみたい。もう、恐くて恐くて、このまま海の底に引きずり込まれて消えちゃうんだって思って、そうしたら、波の向こうから『かよーっ』ってお父さんの声がした。そっちを見たら、波の壁をばっと突き破って、お父さんが来てくれたんだ。『もう大丈夫だ』って。

M ああ、ずいぶん前のことだね。

K うん。今分かったんだ。お母さん出て行ってから、私、ずっと誰もいない家に帰ってた。さみしくてさ

みしくて、周りが見えない壁が立ってて、閉じこめられてるみたいに。しょうがないから、壁のことを忘れるように、ずうっと夜中まで、こっやってネットやるようになったんだ。

M そうだったんだ。

K でもね、ほんととは、あの時みたいに、壁を突き破って、お父さんが救いに来てくれるのを待ってたんだ。

M 「お父さんお父さんすぐ来てくださいお父さんお父さんお父さん」って。

M そう…か。

K でも無理だよな。仕事忙しいし。

E きつと、とても大事な仕事なんですよ。

K たぶんね。分かってるから甘えられなかった。でも、夜中に帰ってきて、部屋のぞいて、「いつまでそんなことやってるんだ。早く寝ろ」って言うだけで、全然話したいこと話せなくて、いらいらして。

M ひどい父親だね。

K でも、私のお父さんはお父さんだけだから。きつと、『かよーっ』って駆けつけようとはしてるんじゃないかな。だから。

E だから？

K むかついてるだけじゃダメかも。

E どうするんですか？

K さあ、明日の朝、顔見たら、『おはよ』くひい言ってみようかな。

M ほんとに!?

K え？ どうしたの。

M いや、べつに。

K 駅員さん。やっぱり、話さなければならぬ人と会って、うそ？
E いやー、どう言ったらいいのかわからないんですけど、えっと…
M うそじゃない。覚えといて。うそじゃない。本当のことは、後で分かるもんだよ。
K そっか。きつとそうなんだろっね。
M うん。
E ええ。
K じゃ、行くね。夜が明けちゃう。さすがに一眠りしないと。
M そう。じゃ。楽しかった。
E 私は微妙ですが。
K だろっね。じゃ。お休みなさい。
K、上手に去る。
M すまなかったな。いろいろと世話かけて。
E いいえ、部長。僕も勉強になりました。
M ところで、藤崎、さっきのは？
E ウイルスでしょうね。データの量が半端でない分、どうもプロテクトが脆弱なようです。公開する前で分かってよかったです。
M そうだな。
E で、あの、試作品だから、無理やりケーブルつないでるんです。僕が今どこにいるか分かりますか。ト
M イレですよ、トイレ。早く帰らせてください。
M すまん、すまん。
E 部長、本当に言わなくて良かったのですか？
M ん？
E 自分が父親だということですよ。
M 最初はそのつもりだった。俺では娘の本音が聞けないのなら、仮想の世界の人物になって聞いてやろう、それからちゃんと名乗ろう。
E それがどうして。
M これまでずっと、家庭から逃げてきたことをはつきり思い知らされたからさ。この会社で二十五年、ひたすらヴァーチャルな世界に現実味を与えるために働いてきたが、一番大事な失ってはならない現実を、俺はないがしろにし続けてきたんだ。
E え、じゃあ、この仕事は？
M ネット上の駅というアイデアは、自分の興味だけに閉じこもりがちな仮想世界の狭さを打開するために、画期的なものだ。藤崎、お前の頑張りも大したものだった。この計画が無意味だとは思わない。ただ、
E ただ？
M あの子が、本当に明日の朝、俺に挨拶してくれるなら、それ以上に世界を広げてくれるものは、俺には作れないと思うよ。
E そうですね。…明日が楽しみですな。
M ああ、そうだな。

M E。

M じゃ、プログラムの不備だけ、忘れない内に拾っとくか。
E 分かりました。

二人はあちこちを相談しながら回り、プログラムの修理を始める。ゆっくり暗転。

幕。